

「香港中文大学派遣参加報告書」

京都大学農学部二年 (氏名) 黒瀬裕貴

最初にこのプログラムの内容を簡単に述べたい。留学先である香港中文大学で、他大学、他国からの学生と共に、おもに講義形式で授業を受ける。平日は毎日、午前(R/W)午後(L/S)合わせて五時間授業があり、課題も出されるので、意欲ある者にとってはかなり充実した内容であった。私自身、読み書き聴き話す、の四技能それぞれで、かなり上達出来たと実感している。中国語(普通語)語学留学という側面においては、今回のプログラムは充分満足のゆくものだった。

そして、以下にそうでなかった別の側面を述べたい。これを書いている今も、あそこでまだ何かをすべきだったのではないかと、後ろ髪を引かれる思いでいる。

今年の三月に、中国杭州の浙江大学中国語留学プログラムに参加した。その動機は今回の香港留学と同じもの、中国を体で感じたい、という思いである。しかし結果として生まれた認識は、前回と今回とで大きく異なっている。自己の位置が変わったからである。それは私がいつ訪れたか、或いは「中国本土」にいたか、「香港」にいたかという違いであり、私の「あり方」の違いでもある。

前回の報告書で、日本と比較して中国の人は現実主義、行動第一だ、と述べた。今思うとこれはひどい言葉足らずで、「大勢の印象としては、しかも若年層を除けば」と、補うべきだった。私を含めた日本のグループが交流した浙江大学の学生、あるいは観光地ですれちがう若者たちは、決してそのような分類を押し付けて良いものではなかった。私自身気づいていたはずなのだが、あの国はそうあって欲しい、というかねてからの想いが認識を狭めたのだろう。

この反省は二つの留学のはざまにあった。そして、これを踏まえて「もう一つの中国」、香港をまなざしたのである。別の土地で生きる彼らは同じではない。けれどそれほど遠くもない。大学で出会う学生、ショッピングを楽しむ少年少女、生き活きとデモを呼びかける青年たち、、、見合った服を着て楽しそうに話し、楽しくもなさそうに携帯をいじり、ここぞというときはいたって真剣、、、彼らは決して、「中国本土」、「民主主義香港」などという概念で二つに割いてしまえるものではないのだ。今回私が身近に触れられたのはこれらの若い人たちだけだが、このことはそれ以外の層の人たちにも当てはまるように思える。

いま、香港が大きく揺れている。熱を帯びた人々は言う、「我々は自由のために戦っている」、「みろ、奴らは我々の同志にこんな仕打ちをした。これが我々の敵だ」、「相手は香港の願いを踏みにじってきた」。

デモに参加する人たちの大半は優しく、けれど理不尽には怒りを向ける、そんな善良な人たちなのだろう。ただ、日を追うごとに上のような言葉が多くなっているのを感じる。

「奴ら」、「相手」とは誰のことを言っているのだろうか。「我々」とは本当に香港の人々を指しているのだろうか。そのような分類で誰かをまなざすとき、人はいくらでも非情になれる。デモ隊が罵声を浴びせる「中国本土側の」警官たちも、特有の「顔」を備えた人である。警官たちが催涙弾を投げ、地に押さえ付ける「香港の」人も当然そう。そして彼らはともに香港で暮らしているのである。

「香港を取り戻す」ことを掲げてデモを行う時、必ず自由を損なう「香港人」がいる。「自由のために、多少の不便はやむを得ない」という論理で大勢が動くとき、少数に不自由を強制して省みないのである。

「全体性の暴力」、自己の内側で対象の意味を固定し、それに従い考え行うこと。私は、「中国の人はこうだろう」とまなざし、「やはりそうだ」と固めてしまった。体はその誤りに気付いていたはずなのに、思念が、そこから生まれる言葉が、心を身体から引き離してしまった。

だが私はその後、心を身体に取り戻し、レヴィナスと出会った。他者との出会い方を知った。レヴィナスを、他者を知った私には香港の状況がそのように映った。そして私は、デモの参加者が、警官たちが、政府が、みなレヴィナスを知れば、悲劇は避けられると信じている。文化大革命の犠牲も、パレスチナの悲惨も避けられたのだと信じている。

こんな大それたことを述べたのは、これが、私が体験した香港において、間違いなく最も重要な一面だからだ。そしてこの体験は、私の将来を大きく変えたと思う。あなたはこれを読んで、眉を顰めるかもしれない。私は私自身の言葉に、責任を負う強さをまだ持たない。言葉に力を与えられない。だからこれは祈りだ。私自身に向けたものである。けれど、もし何かを汲み取ってくれたなら、望外の喜びだ。

最後に断っておくが、私はデモの現場を見ていない。だから当然、そんな人の言葉は信じられない、と思うのも、あなたの自由だ。